



AA コンポーネント
Special Issue

ADLより本格ヘッドフォンとヘッドフォンアンプが登場

ピュアグレードを追求する 膨大なノウハウが結実

Text by
山之内 正
Tadashi Yamanouchi

Photo by 田代法生

ADL X1

192kHz/24bit対応
USB DAC搭載ヘッドフォンアンプ
¥41,790 ※外観に変更の可能性あり

SPEC

●DACチップ: ESS-ES9023 ●オペアンプ: TI-LMV832 Dual 3.3MHz EMI-Hardened Low-Power CMOS ●ヘッドフォン出力レベル: 40mW (12Ω)、65mW (16Ω)、100mW (32Ω)、107mW (56Ω)、36mW (300Ω)、19mW (600Ω) ●周波数特性: 20Hz ~ 20kHz (±0.5dB) ●S/N: 95.5dB (32Ω)、98.1dB (56Ω)、101.6dB (300Ω)、102.1dB (600Ω) ●サイズ: 68W×16.5H×118Dmm ●質量: 約147g



ADL H118

ヘッドフォン
¥23,100

SPEC

●型式: 密閉ダイナミック型 ●ドライバー: 口径40mmネオジウムマグネット ●出力音圧レベル: 98dB ●周波数特性: 20Hz ~ 20kHz ●最大許容入力: 200mW ●インピーダンス: 68Ω ●ケーブル: 約4.5N ●イヤークラッド素材: ソフトレザー ●コード: 片出し3.0mスレート(着脱式) ●質量: 約245g(ケーブル含まず)

■ヘッドフォン「ADL H118」
高度な素材と技術が集結した
ダイナミック密閉型モデル

フルテックのノウハウを活かした同社初のヘッドフォン「ADL H118」がADLブランドから登場した。骨太なデザインの外装にはブランドを象徴する「a」の文字を大きく掲げ、音へのこだわりの強さをアピール。下部を絞り込んだイヤークラッドの形が目を引き、この「アルファ・トリフォーム・イヤークラッド」の独自形状は、隙間を減らして耳をすっぽり包み込むことを狙ったものだ。市場を賑わす膨大な製品群のなかに埋もれることなく個性を発揮する秀逸なデザインだと思ふ。

ドライバーは40mm口径のダイナミック型を採用し、特殊ポリマー製振動板、銅メッキを施したアルミ合金ワイヤーなど素材へのこだわりは枚挙にいとまがない。また、ボイスコイルと振動板の間に挿入されたリングは異なる周波数同士の干渉を抑え、クリアな再生音を実現する効果があるという。コードは着脱式で長さは3m、コネクタにはロジウムメッキを施したaminixLRを採用するなど、フルテックらしいきめ細かい配慮が行き届いている。

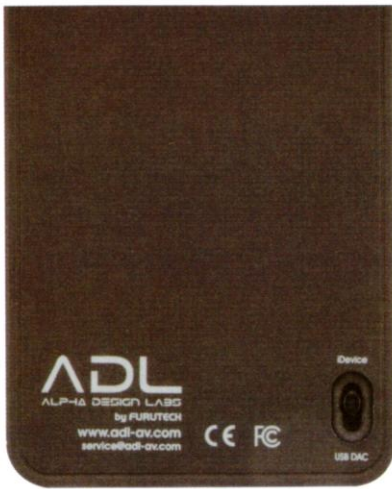
■ポータブルヘッドフォンアンプ「X1」
iOSとのデジタル接続が可能
ハイレゾ対応のDACも搭載

H118の発売後、ADLからもつ

一つ重要な製品が登場する。192kHz/24bit対応のUSB DACを内蔵するポータブル型ヘッドフォンアンプ「X1」で、USBオーディオに加え、iOS機器からデジタル出力を取り出して高音質再生ができることが大きな特徴だ。iOS機器との接続は従来のドックコネクタだけでなく Lightning ケーブルにも対



iPhone5に装備されるApple Lightningコネクタとの接続を可能とする同社のLightningケーブル「iD8-A」(¥7,560/10cm)。オーディオグレードでのモデルは初となり、導体には28AWG α-CCのシルバーコーティング素材を採用



ボトムパネルにはUSB AとUSB mini B入力の切り替えスイッチを装備。なお、切り替え時にはX1の再起動が必要となる。



ヘッドフォン出力と兼用となる3.5mm端子からの光デジタル出力も可能。こちらは192kHz/24bitまでの出力に対応。ヘッドフォン出力はインピーダンスが12Ωから600Ωまでに対応。GND TRRS切り替えスイッチを搭載し、スイッチを切り替えればマイクリモン付きイヤフォンを使用することも可能。3.5mmステレオミニ端子によるアナログLR(RCA)入力にも対応。電源はUSBバスパワーまたは内蔵充電式リチウムイオン電池となる



USB mini B端子でPCと接続した場合には、192kHz/24bitまでのUSB入力に対応。また、アシンクロナスモードやASIOに対応し、88.2kHzや176.4kHzの入力も可能。USB A端子はアップル製のiOSデバイスとのデジタル接続が可能で、30pin dockケーブルおよびLightningケーブルの両方の接続に対応。この場合は48kHz/16bitでの伝送となる

応しており、新旧両世代のプレーヤーと組み合わせられる。パソコンとiOS端末両方で高音質再生を実現し、標準でLightningにも対応する製品はまだ限られているので、本機の登場を歓迎する音楽ファンは多いはずだ。

USBコントローラーはX MOS社のXSL101A-TQ48、DACはESSのES9023を採用し、USB接続ではアシンクロナスモードでの伝送に対応する。ポータブル機とはいえ、DACの仕様に妥協がないことに感心する。また、ステレオミニ規格のアナログ入力と光デジタル出力(ヘッドフォン出力兼用)を備えるなど、入出力も既存モデルに比べて大幅に強化された。

X1の電源はバスパワー動作とリチ

ウムイオン式内蔵バッテリーの両方に対応しており、後者では約7〜7.5時間の動作が可能だ。CRUISEほどの長時間駆動ではないが、本機は1.47gと軽く仕上げられているので、内蔵電池だけでここまで使えるのはむしろ意外に感じる。

■「H118」単独での音質的魅力
どんな音源を聴いても質感の高さが強い印象

最初にH118を単独で試聴した。密閉型らしい優れたS/Nとバランスの良い自然な音調が基本で、小音量から大音量までのボリューム領域でも特定の音域に誇張を感じさせることがない。ひとことで言えば「落ち着いたサウンド」を聴かせ、いい意味で大人のテイストが感じられる。

誇張はないが低音には十分なエネルギーが乗っている。ベースの動きは鮮明に浮かび、余分な響きや共振音をあとに残さず、キレが良い。ウォークはエッジを立てずになめらかなタッチでフォークスの良い音像が浮かび、ギターやピアノとのセパレーションも高い水準をキープ。クラシックの音楽曲やオーケストラを含むどんな音源を聴いても、まず質感の高さを強く印象付けるサウンドだ。

■「H118」+「X1」での音質的魅力
ポータブルの限界を超えた
広大な音場空間は圧巻だ

次にX1とiPhone5を専用ケーブルでつなぎ、H118で聴く。iOSの仕様上48kHz/24bitの伝送になるが、中高域の付帯音や低音のこもり感が少なく、デジタル接続のメリットを確実に聴き取ることができ。パソコンとのUSB接続ではハイレゾ音源の緻密なテクスチャを漏らさず引き出し、こちらもポータブルアンプの限界を感じさせない。広大な音場空間は圧巻だ。

■ヘッドフォン用リケーブルを試す
ヘッドフォンの音調を維持し
解像度とダイナミクスが向上

H118には専用リケーブルが用意されており、簡単に交換できる。ヘッドフォンの音調はそのまま維持しつつ、解像度とダイナミクスの両方で一歩踏み込む印象だ。ヘッドフォン側でのタッチノイズが減る効果もあり、交



写真左からH118のリケーブルに対応する「iHP-35X」(¥7,980/1.3m、¥10,836/3m)。写真中央がSENNHEISER(HD800)専用のリケーブル「iHP-35H」(¥18,900/1.3m、¥27,720/3m)。写真右はSENNHEISER(HD650)向けの「iHP-35S」(¥13,650/1.3m、¥19,950/3m)。その他SHURE(SRH1840/SRH1440)専用の「iHP-35ML」(¥14,700/1.3m、¥21,210/3m)もラインアップ(それぞれXLRプラグ仕様もあり)

換するメリットは大きいと感じた。リケーブルは他ブランド向けにも3種揃えており、HD650との組み合わせでは音場の密度と空間サイズの向上など、ポジティブな方向での効果を確認した。

ヘッドフォン再生の音質改善を目指すフルテックの取り組みはこの数年目覚ましい成果を上げてきたが、膨大なノウハウの積み重ねにより、いよいよヘッドフォン本体にたどり着いた。着実な歩みが結実したことを大いに歓迎したい。